

新しいもの

小田垣雅也

敗戦のときは、わたしは中学(旧制)四年生、たしか一五歳であった。そのころ、親が新しい野球のボールを買ってくれて、弟と二人でキャッチボールをして遊んでいたことがある。当時は物資欠乏の時代で、親がどうして新しいゴムのボールを手に入れてくれたのか分からないが、真っ白のゴムの新しいボールが、土で汚れるのが気がかりであった。そして、新しいものは必ず古くなるという、ある意味では哲学的命題を、わたしはそのとき考えたりした。

その後、大学へ進み(その前にわたしは肺結核になって、実際に大学へ入ったのは七年遅れであったが)、大学のある講義で、新しさには二つの種類があることを学んだ。一つは新・旧の場合の「古さ」

に 対 向 し た 意 味 で の 「 新 し さ 」 、 も う 一 つ は 、 決 し て 古 く は な ら な い 新 し さ で あ る 。 英 語 で 言 う と 、 前 者 は ニ ュ ー 、 後 者 は ノ ー ヴ ェ ル で あ る と い う 。 ニ ュ ー に は オ ー ル ド の 場 合 の よ う に 対 義 語 が あ り 、 こ の ニ ュ ー と し て の 新 し さ は 、 新 し い ボ ー ル の よ う に 、 使 っ て い る と 古 く な る が 、 ノ ー ヴ ェ ル は 決 し て 古 く は な ら ず 、 し た が っ て 対 義 語 が な い 。 そ の 教 師 は 、 ノ ー ヴ ェ ル を 「 新 奇 さ 」 と 訳 し て い た と 思 う 。 ち な み に 、 英 和 大 事 典 を 繰 っ て み る と 、 novel に は 「 新 奇 さ 」 と い う 訳 に く わ え て 、 「 新 し い 種 類 の 」 「 見 た こ と の な い 」 「 今 ま で に な い 」 な ど の 訳 語 が な ら ん で い る 。 要 す る に ノ ー ヴ ェ ル は 、 今 ま で に な か っ た よ う な 新 し い も の 、 遠 か ら ず 古 く な る よ う な 、 新 し さ で は な い 「 新 し さ 」 ら し い の で あ る 。 こ れ は わ た し が 神 学 科 で キ リ ス ト 教 学 を 学 ん で い た せ い か も し れ な い が 、 た ぶ ん そ の 教 師 は 、 「 神 の 国 」 は 決 し て 古 く は な ら な い 新 し い も の で あ り 、 今 ま で に 見 た こ と の な い も の だ 、 と い う 信 仰 論 的 事 情 を 説 明 す る た め に 、 こ の 区 別 を 解 説 し た の だ と 思 う 。 も っ と も 、 そ う 解 明 し て し ま っ て は 、 議 論 は そ こ で お し ま い 、 み た い な と こ ろ が あ る が 。 し か し 「 新 し さ 」 に は 、

遠からず古くなる新しさと、常に新しいもの、それこそが本当に新しいもの、の二種類があることは覚えておいたほうがよいだろう。

今日テキストにえらんだ、「人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない」とイエスが言ったのに対して、ユダヤ人の議員であるニコデモが「年をとったものがどうして生まれることができますでしょう。もう一度母の胎内に入って生まれることができるでしょう」と言っている(ヨハネ伝三章三～四節)。この「新たに」の原語はアノセンだが、新約聖書用の『ギリシャ語—英語辞典』では、アノセンには「新しく」「再度」、また「初めから」の意もあるにはあるが、第一に挙げられている意は「上から」である。「上から」、つまり線的時間の「前方から」「後方へ」ではない。そして「アノセンから」は、「天国から」の意だと、解説がしてある。すると今日のテキストは「人は、上から、つまり天国から、生まれなければ、神の国を見ることはできない」ということになる。このように訳してしまつては、あまりにステレオタイプすぎるようなとこ

ろがあるが、「新しく生まれる」には、このような、ある意味では線的時間の範疇を超えた意味があるようだ。

「ニュー」の新しさが、線的・時間的かつ対象的で、それは必ず古くなるのに対して、「ノーヴェル」の新しさは現実的・カイロスのかつ主体的であるといえようか。時間にも、クローノスと、カイロスの二種類があることは知られていよう。クローノスが線的時間であるのに対して、カイロスはいわば主体的時間である。今日のテキストは、このカイロスの意味で、つまり「この瞬間に、上から、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできない」といっているのではないかと思う。ニコデモはカイロスの新しさを、クローノス的な意味での新しさと取り違えているのだと思われる。しかし、カイロスの意味で「新しく生まれる」とはどういうことか。

たしか去年の一月の末に、NHK のテレビで『喜びは創りだすもの、ターシャ・テューダーの四季の庭』という、世界中のガーデナーたちが憧れているという、ターシャの庭の一年を追った番組があった。ターシャ・テューダーとは兎やその他の動物の絵（童画の一種）で有名な画家で、当年九〇才になるという。その動物や草花の絵は、子供向けの絵本などで見たことがある人が多いだろう。アメリカのヴァーモント州にあるというその庭は、庭と言っても三〇万坪だそうで、とてもターシャ一人では手入れはできないだろうと思う。それはともかく、ターシャは毎日、何十種類もの草花の手入れをし、春にも、夏にも、秋にも、粗末なヴェランダで午後の紅茶を飲み、時に絵を描き、庭の花々に囲まれて一人で暮らしているという。冬が来て庭が雪に覆われると、「この雪は春に咲く草花の毛布なの」と言う。そして、「毎年々々花が咲くのは、奇跡だ」という意味のことを言っていた。

「年々歳々、人おなじからず、年々歳々、花みなおなじ」という人生の無常を表現した諺があるが、そ

れに対してターシャは、花が毎年咲くのは奇跡だと言うのである。この番組が感動的であるのは、ターシャの中では、花が年々歳々咲くのは奇跡であり、それは「新しい」ことだからだろう。それが「上からの」、アノセンとしての、カイロスの新しさなのだと思う。新しいとは、この場合、今年も新しい花が咲いたというだけの問題ではなくて、ターシャが奇跡だといって感動する、ターシャの心の問題だということだ。本当に新しいもの、決して古くはならない新しさとは、結局心の中の新しさ、心の積極性なのだと思う。古いヴェランダで、たぶん同じ茶碗で、同じ姿勢で、午後の紅茶を飲みながら、ターシャは決して退屈していない。ターシャにとって、毎日が新しい喜びなのだ。

まことに番組の副題にあるように、「喜びは創りだすもの」なのだ。わたしたちが春に芽をだし、夏に花を開き、秋に枯れて冬は雪に覆われる草花を、単に対象として観察しているだけだったら、それは当たり前で、その場合の花は遠からず古くなり、枯れる。通常の花のように、だ。決して古くはならない「新し

さ」、「上からの」新しさとは、ターシャのように、花を奇跡だと、本当に感動する心の中にある。しかしそれが決して古くはならない、本当の「新しさ」ということではなかろうか。ターシャの心が新しいのである。それが生き方の積極性ということだろう。これは「気の持ちようで、当たり前の花も新しいのだ」などということではない。主体性の問題、カイロスの問題なのだ。

花が何の花でも美しいのは、わたしたちが、花のいわばカイロスとしての存在の新しさを、心のどこかで知っているからではなかろうか。線的・科学的意味での新しさは、本当に新しくはないのである。それは必ず古くなる。新しい野球のボールも、いずれは古くなるように、である。造花が新しくても、生花のような美しさ特有のある緊張感がないのは、それは単に新しい造花というだけで、遠からず古くなるからだ。わたしたちはそのような時、古くなり埃をかぶった造花を、無意識のうちに考えている。ターシャの庭が有名であるのは、「地面を覆っている雪は春の草花の毛布なの」というような、または「花が毎年咲くの

は奇跡だ」というような、ターシャの心の新しさと積極性が、染みとおっているからだろうと思う。それがガーデニングというものだと思う。春に花が咲くのは当たり前だ、と言ってしまっただけは、新しさも美しさもない。「あら、綺麗ね」と言うだけだ。雪も、ただ鬱陶しいだけである。もともと奇跡を信ずるとは、毎年花が咲くという当たり前のことに驚くことのはずだ。当たり前のことのなかにこそ、カイロスの新しさ、美しさはある。新約聖書の「ヨハネの黙示録」に描かれているような回天動地の、唯一回的天変地異としての奇跡などは、もしあったとしても、すぐに古くなる。イエスの復活のそうだろう。それは奇跡ではない。奇跡はいつも新しいのである。天国もそうだ。

今日は新年礼拝だが、わたしはつくづく、本当の新しさとはどういうことか、と考える。わが身を振り返ってみると、わたしは古いものにばかりとらわれているように思える。たとえばわたしの身体的悩みの

一つに、この半年ぐらいとくにひどい不整脈がある。不整脈というのは、わたしの場合、規則正しく打っている脈拍が一つ跳んで、次の脈が大きく打つという形のものである。それが断続的につづく。それが続くと夜も眠れない。ただし複数の医者は、それは健康な人にもしばしばあり、ただそれに気づかないだけで、全く問題はない、治療の必要もない、と言う。それならそれで、わたしはそれを気にしなければよく、そこで新しく——大袈裟な言葉だが——生きはじめればよいのだが、わたしはそれを延々と気にしているのである。そこには、それを気にしている古い自己が、いわばとぐろを巻き、新しい自己になっていない、と思うのだ。それを本当に気にしない新しい現実になれば、不整脈そのものもなくなるとは言わないが、少なくとも意識としてはなくなるだろう。

カイロスとしての新しさと、クローノスとしての新しさを区別せず、クローノスとしての新しさが古くなることに抵抗し、それにしがみついていたら、生き方は混乱する。それは新しいボールが何時までも新しく

あるように望むこととおなじだからだ。わたしたちの悩みの大部分は、クローノス的新しさにしがみついて同じ悩みを繰り返し、後悔ばかりしていることから生まれる。人間が不老長寿を望むのも同じである。昔の王侯貴族たちは、不老長寿の薬を求めているいろいろ苦労したという話だが、それは無理というものだ。真の新鮮さは、普通の物事に感動する心の中、心の積極性の中にある。ターシャ・テューダーのように、である。それはカイロスの生にあるのである。(05Z27)